

藤波こども園

園長だより

No. 4 9

令和元年 6 月 3 日

文責 竹原 篤



旧 藤波幼稚園



現 藤波こども園

新年度がスタートして、2ヶ月が過ぎました。本園に着任させていただいて一番驚いたことは、子どもたちが園生活において、自らやりたいことを自らの思いで自ら進めて楽しんでいるところです。この2ヶ月「教職員はどんな風に子どもたちと関わっていくのだろう」と勉強してきました。先生（教職員）からの厳しい指導や怒られている場面を見たことはありません。先生は「園児の取組やトラブルに対して教え込む指導ではなく、励ましや思いを引き出す声かけ」をしているように思いました。毎日の子どもたちの活動は先生からさせられる活動ではなく、子どもたちの思いからはじまり先生はより安全により楽しく活動が進められるようにいっぱい時間をかけて、子どもたちの生活経験から出てくる意見を大切に受けとめ、進め方（ルールを含む）や準備物まで



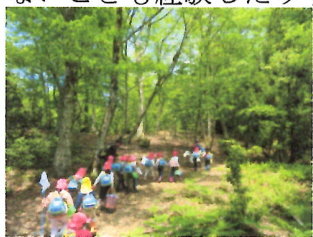
子どもたちが決めていきます。子どもたちの意見は大きく三つあると思います。一つ目は卒園していった園児の姿をモデルにしているような意見が多くありました。本園の特色である午前中は全て3～5歳児が混在しているホームという縦割り活動をしているため、年長さんのカッコいい姿にあこがれで自分も年長さんのようになりたいという保育・教育が継続されているからだと思います。二つ目は家族の皆さんからお話ししていただいたことや家族で体験させていただいたことから出てくる意見も多くありました。三つ目は地域のお祭りや地藏盆などの伝統行事で体験したことから出てくる意見も多くありました。子どもたちが自ら活動できるようになるためには子どもたちのまわりにいる大人の言動がモデルになっているように感じました。私も含め園児のよいモデルになれるように努力していきたいと思います。

このような藤波こども園の保育・教育方針はどの行事や活動をとっても根底に流れる子どもたちへの関わりについては何ら変わることがない。個々の子どもたちに合わせて図っていき、活発な子もおとなしい子も、みんなそれぞれに力があり個性がある。それらを少しでも引き出しながら毎日自分を表出できるように「聞く」「待つ」「認める」「共感する」「怒らない」「信じる」といった子どもたちとのやりとりが連日続いている。これからも担任の先生だけでなく、全ての教職員が連携をとり、子どもたちの笑顔をいっぱい見れるように保育・教育を進めていきたいと思います。

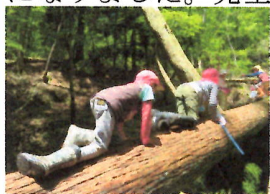


子ども あれこれ

月組（年長）の遠足に行って心に残ったことを書かせていただきます。遠足は日頃の子どもの成長を見る・知る良いチャンスでもあります。子どもの考えや思いをどこでどう発揮しているか。日常保育教育にないことも経験したりするので年齢に合わせて



て「自分のことは自分です」という責任を含む経験にもつながります。「一人でできた」・「お友だちのこと手伝ってあげた」喜びという経験は子どもの自信や達成感にもつながって行きます。天候にも恵まれ子どもたちは大自然の中で自分自分の思いを発揮し、のびのびとした活動を行うことが出来ました。そして、よい経験をいっぱい味わい楽しい遠足になりました。先生が常に園児一人ひとりに寄り添っての指導のたまものだ后感心しました。子どもたちの思いでもう一度「くつきの森」へ遠足に行くことになりました。この遠足の日にご家庭においても園児と一緒に風呂に入って楽しい話をゆっくり聞いてあげてください。そしてたくさんほめてあげてくださることをお願いいたします。



子どもたちの思いでもう一度「くつきの森」へ遠足に行くことになりました。この遠足の日にご家庭においても園児と一緒に風呂に入って楽しい話をゆっくり聞いてあげてください。そしてたくさんほめてあげてくださることをお願いいたします。



ありがとうございます。 【いただきました】

- | | |
|--------------|-------|
| ①積み木一式 | 横塚様より |
| ②携帯ミニ図鑑26冊 | 水野様より |
| ③手作りパズル | 黒田様より |
| ④チョウの観察用キャベツ | 井口様より |

保護者・先生あれこれ

小学校に勤めていた若い頃に先輩から教わったことで今も大切にしていることを書かせていただきます。「いつも子どものそばにいる」「いつも子どもがそばにいる」助詞を代えるだけで矢印が変わります。先生にはこうであってほしいと思っていました。いつでも子どもの方へ行く先生、子どもがいつも先生の周りにいる先生。今もそうなってほしいと思っています。



保護者の皆さんも子どもとこういう関係であってほしいと思います。でもこれは決して「子離れしない」という意味ではありません。また、べったりといつまでも体をくっつけておくという意味でもありません。子どもが小さいときは子どもを「抱きしめて」いいと思います。小学校に入っても低学年の間は子どもを「抱きしめて」いいと思います。中学年になると「肩をぐっと抱く」程度、そして高学年になると「肩をポン」「握手」ぐらいでいいと思います。体にちょっと触れるってことはとても大切だと思います。「いつも子どもの（が）そばにいる」とは心と心の結びつきを言います。「親はいつもあんたのそばにいて、いつでも助けができるよ」とか「僕が困ったときは相談するからお父さん(母)さん、見守っててや」という関係を心のつながりと思います。そのために大切なことは、次号のNo.50で書かせていただきたいと思います。



藤波学園の評議員・理事をしていただいている山野博様から職員室の机を頂きました。多くの職員が一同に仕事ができるようになりありがとうございました。

